

# 教育研究業績書

2024年10月22日

所属：食物栄養学科

資格：教授

氏名：林 宏一

研究分野	研究内容のキーワード
公衆栄養学, 公衆衛生学, 地域保健学	予防栄養, 環境と栄養問題, 地域栄養改善活動
学位	最終学歴
博士(医学)	東京農業大学 農学部 栄養学科 卒業

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1. 公衆栄養学フィールドワーク理解のためのスライド	2007年04月	公衆栄養学において実施されるフィールドワークの進め方、留意点等をわかりやすく解説したスライドを作成した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 管理栄養士		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 大阪市こども・子育て支援会議専門委員	2016年6月3日～現在	大阪市こども・子育て支援会議教育・保育施設等事故検証部会において専門的見地から保育行政に協力
2. 大阪府豊中市食育推進協議会委員（会長）	2016年6月1日～現在	大阪府豊中市の食育推進行政の審議
3. 大阪府豊中市食育推進協議会委員（会長）	2016年6月1日～現在	大阪府豊中市の食育推進行政の審議
4. 大阪府豊中市食育推進協議会委員（会長）	2016年6月1日～現在	大阪府豊中市の食育推進行政の審議
5. 管理栄養士国家試験委員	2013年8月～現在	栄養士法に基づく管理栄養士国家試験業務に従事
6. 川西市食育推進会議委員（副会長）	2010年9月～現在	兵庫県川西市の食育推進行政の審議
7. 兵庫県相生市食育推進協議会委員	2009年6月30日～現在	兵庫県相生市の食育推進行政の審議
8. 管理栄養士国家試験委員	2001年10月～2011年8月	栄養士法に基づく管理栄養士国家試験業務に従事
4 その他		
1. 厚生労働大臣表彰	2024年10月13日	栄養士養成成功労
2. 兵庫県知事表彰	2022年5月28日	栄養士養成成功労者
3. 全国栄養士養成施設協会理事長表彰	2014年11月	管理栄養士・栄養士養成成功労

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 公衆栄養学（改訂第6版）	共	2019年3月31日発行	南江堂	管理栄養士国家試験改定ガイドラインに対応した管理栄養士養成課程学生用のテキストである。編集者を務めるとともに、公衆栄養活動、組織・人材育成、地域集団の特性別プログラムの展開を分担執筆した。 古野純典, 吉池信男, 林 宏一, 他
2. 管理栄養士養成課程におけるモデルコアカリキュラム2015準拠 導入教育一信頼される専門職となるために一（第2版）	共	2016年03月25日第2版発行	医歯薬出版株式会社	第1章公衆栄養学の概念B公衆栄養活動, pp7-12, 第3章栄養政策B公衆栄養活動と組織・人材育成, pp59-62, 第6章公衆栄養プログラムの展開C地域集団の特性別プログラムの展開, pp242-267
3. 現場で役立つ公衆栄養学実習	共	2015年03月31日発行	同文書院	日本栄養改善学会が提案した「管理栄養士養成課程におけるモデルコアカリキュラム」において、管理栄養士をめざすことへの動機づけ教育を担うテキストである。その中の「地球レベルでの栄養の課題と取り組み」（第3章）において、人口問題と食料事情の現状、将来の見通し等を執筆した。伊達ちぐさ, 木戸康博, 林 宏一, 他。第3章の1)世界および日本における食料需給の実態と今後の展望, pp53-57 公衆栄養活動の中心となる行政栄養士として活躍できる管理栄養士を養成するための実務を中心に構成されたテキストである。公衆栄養アセスメント中の「情報の処理と分析」部分を担当した。橋本加

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
4. 公衆栄養学	共	2015年01月30日五訂版発行	建帛社	代, 嶋津裕子, 木林悦子, <u>林 宏一</u> , 大畑仁美, 千歳万里, 伊藤裕美 管理栄養士国家試験改定ガイドラインに対応した管理栄養士養成課程学生用のテキストである。その中の公衆栄養マネジメントについて、アセスメントから評価までを分担執筆した。 八倉巻和子, 井上浩一, 井上栄, 笠原賀子, 小林実夏, 佐々木敏, 鈴木和彦, 須藤紀子, <u>林 宏一</u> , 本田榮子
5. 臨地実習ガイドブック	共	2011年02月	建帛社	管理栄養士課程・栄養士課程における必修科目である臨地実習(校外実習)を受講するにあたり必要となる知識、技術、マナー等について解説したテキストである。この中で、管理栄養士課程(公衆栄養学)の臨地実習である保健所、市町村保健センター等行政栄養士業務に関する部分、栄養業務に関連する法規の部分について、担当執筆した。
6. 公衆栄養学	共	2005年04月	建帛社	前田佳予子, 高岸和子, <u>林 宏一</u> , 谷野永和, 岸本三香子 公衆栄養の歴史から最新の公衆栄養学の知見、公衆栄養プログラム、各種関係資料等を紹介した書籍である。その中の公衆栄養活動(公衆栄養プログラム計画、公衆栄養プログラムの目標設定、公衆栄養プログラムの実施、公衆栄養プログラムの評価)を担当執筆した。 八倉巻和子, 井上浩一, 井上 栄, 笠原賀子, 佐々木敏, 鈴木和彦, 須藤紀子, <u>林 宏一</u>
7. 新公衆栄養学	共	2003年05月	第一出版	公衆栄養の歴史から最新の公衆栄養学の知見、実際に行われているプログラム、各種関係資料等を紹介した書籍である。その中の公衆栄養プログラム計画、公衆栄養プログラムの目標設定、公衆栄養プログラムの実施、公衆栄養プログラムの評価を担当執筆した。 藤沢良知, 原 正俊, 芦川修貳, 中原澄男, 辻悦子, 大谷八峯, 藤澤由美子, 小林良子, 原美智子, 中村丁次, <u>林 宏一</u> , 大江秀夫, 武見ゆかり
<b>2 学位論文</b>				
1. 珪肺症における血清過酸化脂質測定意義に関する研究	単	1994年12月	金沢大学	塵肺症患者の予後改善対策を探る目的で、珪肺症患者を対象にX線による塵肺病型分類と血清中過酸化脂質濃度との関連性を研究した。その結果、塵肺の重症度と血清中過酸化脂質濃度上昇との間に、身体状況や喫煙、食習慣等の関連要因をコントロールした上でも有意な相関関係があることを発見し、完治が難しく、進行を遅らせるしか治療方策のない塵肺症患者の予後改善に過酸化脂質抑制の観点から貢献した。
<b>3 学術論文</b>				
1. Assessing the Competency Scale for Registered Dietitians as a Comprehensive Evaluation Tool: Examining Curriculum Progress over Time	共	2024年	Preventive Medicine Research, 2024, 1(5):55-63	本研究は、管理栄養士に関連するコンピテンシー尺度を学生のモニタリングツールとして活用する可能性を評価するために、カリキュラムの進展に伴う管理栄養士コンピテンシー尺度の経年変化について調査した。管理栄養士養成プログラムに在籍する2年生167人を対象に、2年次と3年次の間に自己記入式アンケートを実施した。すべてのコンピテンシーの合計スコアは、学生が基礎から応用専門科目への移行期であるプログラムの2年次から3年次への移行期に有意に高かった。これは、管理栄養士コンピテンシー尺度スコアがカリキュラムの進展に伴って向上したことを示している。これらの結果は、尺度を卒業までに学生が習得すべき資質と能力を定期的にモニタリングするための包括的な評価ツールとして使用できる可能性を示唆している。 Sakiko Tamaki, Yuuki Nishimura, Naoto Otaki, Aya Ogawa, Yorika Matsuda, Chihiro Toji, Masaki Enshoujiwa, <u>Koichi Hayashi</u>
2. Association between social participation and life satisfaction among community-dwelling older adults who live	共	2023年3月	Journal of Preventive Medicine, 2023, 17:1-8	本人担当: Corresponding author 本研究の目的は、70歳以上の独居高齢者における社会参加と生活満足度の関係を調査することでした。社会福祉N市協議会の社会活動に参加を希望するN市H県在住の高齢者2,027人にアンケート調査を実施しました。そのうち1,420人の高齢者が回答し、分析に含まれました。自己記入式のアンケートを用いて、回答者の年齢、性別、N市への居住年数、独居年数、婚姻状況、生活満足度、社会参加レベル、主観的健康観、自己評価経済状況、自炊頻度、病院通院状況を調査

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
alone (査読付)  3.Higher Intake of Vegetable Protein and Lower Intake of Animal Fats Reduce the Incidence of Diabetes in Non-Drinking Males (査読付)	共	2023年2月	Nutrients. 15(4) ; 1040, 2023.	<p>しました。分析に含まれた高齢者のうち、622人(43.8%)が社会活動に参加していると回答し、残りの798人(56.2%)は参加していないと回答しました。粗オッズ比によると、社会活動に参加していない高齢者は、生活満足度が有意に低かった(OR: 2.937, 95 %CI: 2.098 -4.111, p .001)。さらに、年齢、性別、主観的健康観、自己評価経済状況などの交絡因子を調整したオッズ比によると、社会活動に参加していない高齢者は、生活満足度が有意に低かった(OR: 1.885, 95 %CI: 1.305 -2.722, p .001)。同様の結果が、年齢別・性別別の分析からも得られました。以上の結果から、社会参加は、年齢や性別などの交絡因子に関係なく、独居高齢者の生活満足度と関連していることが明らかになりました。</p> <p>Michiko Akita, Naoto Otaki, Miyuki Yokoro, MegumuYano, Yuuki Nishimura, <u>Koichi Hayashi</u>, Norikazu Tanino, Keisuke Fukuo</p> <p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>栄養摂取とアルコール摂取はともに糖尿病の発症と密接に関連しているが、その相互関係はまだ明確ではない。そこで、本研究では、栄養摂取、アルコール摂取、および糖尿病発症との相互関係を、縦断データを用いて調査した。日本在住の40歳以上の969人を対象に、2011年と2012年には、基本的な人口統計、糖尿病、栄養摂取、生活習慣に関するアンケート調査を行った。また、2018年と2019年には、糖尿病に関するアンケートと医療記録を用いて追跡調査を行った。二元配置共分散分析(2要因のANCOVA)を使用して、飲酒習慣と栄養摂取の相互作用が糖尿病発症に与える影響を検証した。ベースライン時の栄養摂取と後方追跡時の糖尿病発症との間の前向きな関係を、飲酒者と非飲酒者で層別化した多変量ロジスティック回帰分析を用いて評価した。その結果、男性では植物性タンパク質摂取量(p = 0.023)および動物性脂肪摂取量(p = 0.016)と糖尿病発症との間に相互作用が見られた。野菜タンパク質摂取は非飲酒者において糖尿病発症と負の相関があった(オッズ比(OR) : 0.208、95%信頼区間(95% CI) : 0.046-0.935, p = 0.041)。さらに、動物性脂肪摂取は非飲酒者において糖尿病発症と正の相関があった(OR : 1.625、95% CI : 1.020-2.589, p = 0.041)。したがって、糖尿病の予防においては、植物性タンパク質摂取量と動物性脂肪摂取量が飲酒習慣と組み合わせられて考慮される必要がある。</p> <p>Aya Ogawa, Hiromasa Tsujiguchi, Masaharu Nakamura, <u>Koichi Hayashi</u>, Akinori Hara, Keita Suzuki, Sakae Miyagi, Takayuki Kannon, Chie Takazawa, Jiaye Zhao, Yasuhiro Kambayashi, Yukari Shimizu, Aki Shibata, Tadashi Konoshita, Fumihiko Suzuki, Hirohito Tsuboi, Atsushi Tajima, Hiroyuki Nakamura</p> <p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p>
4.Relationship between Vitamin Intake and Resilience Based on Sex in Middle-Aged and Older Japanese Adults: Results of the Shika Study. (査読付)	共	2022年12月	Nutrients . 14 (23); 5042 2022.	<p>疫学研究によれば、一般的に逆境に立ち向かうストレス管理能力とされるレジリエンスは、中年および高齢者のメンタルヘルスと関連している。現在、レジリエンスに影響を与える食習慣に関する情報は限られている。したがって、この横断的研究では、日本の石川県志賀町に住む中年および高齢者を対象に、ビタミン摂取とレジリエンスの性に基づく関係を調査した。分析対象には、40歳以上の221人(男性106人、女性115人)が含まれている。ビタミン摂取とレジリエンスは、簡易型自己記入式食事履歴調査(BDHQ)とレジリエンススケール(RS)を用いて評価した。二元配置共分散分析(ANCOVA)によると、β-カロテンとビタミンKの高い摂取量は、女性においてのみ高いRSと関連していた。さらに、性別別に層別化した多変量ロジスティック回帰分析では、β-カロテンとビタミンKが女性におけるRSの有意な独立変数であることが示された。この研究結果から、中年および高齢の女性において、β-カロテンとビタミンKの摂取量が高いほど、より高いレジリエンスと関連している可能性が示唆された。得られた結果は、β-カロテンとビタミンKの摂取がストレス耐性を強化することで、レジリエンスを高める可能性を示した。</p> <p>Kuniko Sato, Fumihiko Suzuki, Hiromasa Tsujiguchi, Akinori</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
5.The association between life satisfaction and self-rated health among Japanese elderly who live alone (査読付)	共	2022年	Journal of Preventive Medicine,2022,16 :45-51	<p>Hara, Takayuki Kannon, Sakae Miyagi, Keita Suzuki, Masaharu Nakamura, Chie Takazawa, Aki Shibata, Hirohito Tsuboi, Yukari Shimizu, Thao Thi Thu Nguyen, Tadashi Konoshita, Yasuki Ono, <u>Koichi Hayashi</u>, Atsushi Tajima, Hiroyuki Nakamura</p> <p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>本研究は、独居高齢者の生活満足度と主観的健康観の関係を調査することを目的とした。参加者は、H県N市の地域在住高齢者（70歳以上）で、独居生活を送っている人々であった。調査アンケートの項目は、性別、年齢、独居年数、生活満足度、主観的健康観、社会参加、生活の楽しみ、自炊頻度、生活状況を評価していた。アンケートは2,027人に配布され、1,915人の回答が分析された。サンプルの平均年齢は78.3 ± 5.7歳であった。さらに、1,614人（84.3%）と301人（15.7%）の参加者が、それぞれ高いおよび低いレベルの生活満足度を報告した。生活満足度の粗オッズ比は、主観的健康観が不良な人の方が有意に高かった（粗オッズ比：4.86；95%信頼区間：3.74-6.30）。さらに、性別、年齢、独居年数、生活満足度、主観的健康観、社会参加、生活の楽しみ、自炊頻度、生活状況を共変量として入力した多変量モデルの分析では、生活満足度の調整済みオッズ比は、主観的健康観が不良な人の方が有意に高かった（調整済みオッズ比：2.89；95%信頼区間：2.15-3.88）。性別および年齢別の層別分析では、生活満足度と主観的健康観の間に同様の関係が観察された。日本の独居高齢者において、生活満足度は主観的健康観と独立して関連していた。</p> <p>Yuuki Nishimura, Naoto Otaki, Miyuki Yokoro, Megumu Yano, Michiko Akita, <u>Koichi Hayashi</u>, Norikazu Tanino, Keisuke Fukuo</p>
6.The Association between Activity of Daily Living and the Combination of Alzheimer' s Disease and Cataract in Elderly Requiring Nursing Care (査読付)	共	2016年8月	Health Vol.8 No. 10, PP. 994-1003, July 2016	<p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>介護を必要とする高齢者におけるアルツハイマー病と白内障、日常生活動作との相互関連性を分析した。白内障手術の有無によって日常生活動作のが異なった。アルツハイマー病患者の認知機能に影響を与えている可能性がある。</p> <p>Toshio Hamagishi, Toshimitsu Inagawa, Yasuhiro Kambayashi, Hiromasa Tsujiguchi, Masami Kitaoka, Junko Mitoma, Hiroki Asakura, Fumihiko Suzuki, Daisuke Hori, Enoch Orlando Anyenda, Nguyen Thi Thu Thao, Yuri Hibino, Koichi Hayashi, Aki Shibata, Takiko Sagara, Jiro Okochi, Kiyoshi Takamoku, Kotaro Hatta, Tadashi Konoshita, Hiroyuki Nakamura</p>
7.The associations between lifestyles and mental health using the General Health Questionnaire 12-items are different dependently on age and sex: a population-based cross-sectional study in Kanazawa, Japan. (査読付)	共	2016年4月	Environmental Health and Preventive Medicine	<p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>この研究の目的は、広範囲の年齢層にわたる精神健康とライフスタイル要因の関連性の潜在的な違いを検証することとした。2011年8～9月に、日本の金沢市に住む4693人の男性（年齢51.6 ± 19.5）と5678人の女性（年齢52.4 ± 19.4）からデータを収集した。クロスセクショナルなコミュニティベースの調査を、一般健康アンケート（GHQ）12項目版、社会的・人口統計学的要因、およびライフスタイル要因を含む自己記入式アンケートを用いて実施した。GHQスコアと他の変数との関連性は、年齢と性別に分けられた2要因の分散分析（ANOVA）による検査、および多重比較とロジスティック回帰を用いて調査した。多重比較によると、20～39歳および40～64歳の人々は、より高いGHQスコアを示した。2要因のANOVAでは、体格指数と年齢層、および運動と年齢層の間で有意な相互作用が示された。40～64歳の肥満または低体重の男性は、通常体重の人々よりも精神的な健康状態が悪いことが示された。高齢者では、低体重は精神的な健康状態と有意な関連があった。若年成人においては、運動が精神的な健康に与える影響はありませんでした。ロジスティック回帰分析では、短時間の睡眠が大人の精神的な健康に負の影響を与えることが示された。Daisuke Hori, Hiromasa Tsujiguchi, Yasuhiro Kambayashi, Toshio Hamagishi, Masami Kitaoka, Junko Mitoma, Hiroki Asakura, Fumihiko Suzuki, Enoch Orlando Anyenda, Thao Thi Thu</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
8. Epidemiological study on the involvements of environmental factors and allergy in child mental health using the Autism Screening Questionnaire (査読付)	共	2013年1月	Research in Autism Spectrum Disorders 2013. Jan;7(1):32-140	<p>Nguyen, Yuri Hibino, Aki Shibata, <u>Koichi Hayashi</u>, Takiko Sagara, Shinichiro Sasahara, Ichiyo Matsuzaki, Kotaro Hatta, Tadashi Konoshita, Hiroyuki Nakamura</p> <p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>本研究では自閉症傾向にある児の生活環境因子およびアレルギー疾患との関連を明らかにし、自閉症傾向児の早期発見のための指標を構築する目的で3?5歳の幼児およびその保護者を対象に自記式配表調査を行った。その結果自閉症得点の高い群は、性別、出生順位等の因子の共存下で鼻アレルギーを有する事が分かった。また鼻アレルギーを有する児は自閉症児の障害の特徴の1つである「独特の興味・こだわり行動」に関連が多く見られた。</p> <p>Shibata A, Hitomi Y, Kambayashi Y, Hibino Y, Yamazaki M, Mitoma J, Asakura H, <u>Hayashi K</u>, Otaki N, Sagara T, Nakamura H.</p>
9. ビタミンC摂取量と食品群別摂取量との関係	共	2012年03月	金城大学紀要12号 23?34頁	<p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>生活習慣病予防を担う管理栄養士・栄養士に、地域住民が日常摂取している栄養素の由来食品群の情報を提供し、栄養改善・指導活動に役立ててもらうため調査を実施した。その結果、研究対象とした地域では、ビタミンCの供給源として男女ともに果物類、緑黄色野菜が重要であることが明らかとなった。さらに男性では、年齢もビタミンC摂取と供給食品群の関係に関連していることが明らかとなった。</p> <p>岡田茂, <u>林 宏一</u>, 柴田亜樹, 築山依果</p>
10. 女性特有の疾患および癌に対する薬膳の効能・効果の評価ならびに桂皮を用いた薬膳からの主成分の確認	共	2012年02月	ノートルダム清心女子大学紀要生活経営学・児童学・食品栄養学編36巻 14?22頁	<p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>女性特有の健康上の悩みを改善することが期待できる4種の疾患（月経痛、便秘、美肌、癌）に有効と思われる薬膳の効能効果に対する検討を行った。その結果、月経痛の改善を目的として作成した薬膳以外の3種の疾患に対する薬膳のレーダーグラフは、その予防・改善効果があるとされる漢方薬のものに近似することが確認された。</p> <p>大西孝司, 逸見真理子, 井上里加子, 村上沙緒莉, 高澤卓子, <u>林 宏一</u>, 野口 衛</p>
11. いわゆる「健康食品」に対する意識調査(Ⅲ) 一人間ドック受診者における調査結果について	共	2012年02月	ノートルダム清心女子大学紀要生活経営学・児童学・食品栄養学編36巻 14?22頁	<p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>市販健康食品に対する意識が実際の生活習慣や保健行動に反映されているか否かを探ることを目的とし、人間ドック受診者に対し自計式調査を実施した。その結果、独居生活者の方が健康食品に対する関心が高いこと、健康の維持増進、疲労回復のため利用するという者が多いこと等が明らかとなった。</p> <p>大西孝司, 逸見真理子, 逸見佐恵子, 高澤卓子, 村上沙緒莉, <u>林 宏一</u>, 岡田茂</p>
12. 鉄摂取量と食品群別摂取量との関係	共	2011年03月	金城大学紀要11号 23?34頁	<p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>地域住民の鉄摂取量に影響を及ぼす食品群について探索する目的で栄養素等摂取量、食品摂取状況調査を行った。その結果、対象地域では肉類、野菜類からの摂取が男女ともに多いことが明らかとなった。</p> <p>岡田茂, <u>林 宏一</u>, 柴田亜樹, 築山依果</p>
13. いわゆる「健康食品」に対する意識調査(Ⅰ)-成人男女の結果について-	共	2010年03月	ノートルダム清心女子大学紀要生活経営学・児童学・食品栄養学編34巻 12-30頁	<p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>市販健康食品の安全確保と利用者への啓発を図るため、成人男女を対象に健康食品に関する意識、利用実態、保健行動を調査した。その結果、年齢が進むにつれ健康食品への関心度が高まること等が明らかとなった。</p> <p>大西孝司, 逸見真理子, <u>林 宏一</u>, 林 千尋, 岡田 茂</p>
14. カルシウム摂取量と食品群別摂取量との関係	共	2010年03月	金城大学紀要10号 17?28頁	<p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>地域住民のカルシウム摂取量に影響を及ぼす食品群について探索する目的で栄養素摂取量、食品摂取状況調査を行った。その結果、対象地域では男女ともに他地域に比べて魚介類からのカルシウム摂取が多いことが明らかとなった。</p> <p>岡田 茂, <u>林 宏一</u>, 柴田亜樹, 築山依果</p>
15. 薬膳の効能効果について-東洋医学的観点	共	2010年02月	ノートルダム清心女子大学紀要生活	<p>本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>メタボリックシンドロームの予防、改善効果が期待できる薬膳を作成し、東洋医学的観点から漢方薬の効能効果を評価することができ</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
からの評価-				
16. フグおよびフグ加工品中のテトロドトキシンの分析	共	2009年02月	ノートルダム清心女子大学紀要生活経営学・児童学・食品栄養学編33巻107?115頁	<p>るレーダーチャートを作成した。レーダーチャートを用いて既存の漢方薬と薬膳の効能効果を比較したところ、高血圧、脂質異常症の予防、改善を目的として作成した薬膳において、効能が期待されることが明らかとなった。</p> <p>大西孝司, 逸見真理子, 林 宏一, 林 千尋, 野口 衛 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p> <p>高速液体クロマトグラフィーを用いたテトロドトキシンの化学的定量試験を行った。その結果、公定法として採用されているマウス毒性試験法に匹敵する良好な結果が得られた。さらにサンプルとしたフグ卵巣糠漬の製造工程におけるテトロドトキシンの消長を観察し、食品加工工程におけるフグ毒消失メカニズム解明の一端が明らかとなった。</p> <p>大西孝司, 林 宏一, 柴田亜樹 本人担当部分はサンプル収集およびデータ解析。</p>
17. 炭水化物摂取と食品群別摂取量の関係	共	2008年03月	金城大学紀要8号85?93頁	<p>地域住民の炭水化物摂取量に影響を及ぼす食品群について探索する目的で栄養素摂取量、食品摂取状況調査を行った。その結果、対象地域では男女ともに米類からの摂取が多いことが明らかとなった。</p> <p>岡田 茂, 林 宏一, 柴田亜樹, 築山依果 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p>
18. 脂質摂取量と食品群別摂取量の関係	共	2007年03月	金城大学紀要7号13?25頁	<p>地域住民の脂質摂取量に影響を及ぼす食品群について探索する目的で栄養素等摂取量、食品摂取状況調査を行った。脂質摂取量を従属変数、食品群を説明変数とし重回帰分析を行った。その結果、男女で脂質摂取量に影響を与えている食品群に差があることが明らかとなった。</p> <p>岡田 茂, 林 宏一, 築山依果 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p>
19. 保育園における食教育の効果	共	2007年02月	ノートルダム清心女子大学紀要生活経営学・児童学・食品栄養学編31巻	<p>幼児期からの生活習慣病予防対策として、公立保育園児とその保護者を対象に食育を実施し、その効果を評価した論文である。食育の内容は園児に対する集団栄養教育、個別栄養教育および保護者に対する「家庭だより」での教育である。その結果、食育終了後の食習慣に、教育群において短期効果が認められた。</p> <p>築山依果, 林 宏一, 武田安子 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p>
20. たんぱく質摂取量と食品群別摂取量の関係	共	2006年03月	金城大学紀要6号13?25頁	<p>地域住民のたんぱく質摂取量に影響を及ぼす食品群について探索する目的で栄養素等摂取量、食品摂取状況調査を行った。重回帰分析の結果、対象地域特有と思われる魚介類を中心としたたんぱく質摂取の実態が明らかとなった。</p> <p>岡田 茂, 林 宏一, 築山依果 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p>
21. 幼児期における食教育の実施とその効果	共	2006年02月	ノートルダム清心女子大学紀要生活経営学・児童学・食品栄養学編30巻30?38頁	<p>幼児期からの生活習慣病予防対策として、保育園児およびその保護者を対象として食育を実施し、その効果を検討した論文である。幼児自身が緑色、赤色、黄色の食品群からバランスよく食品を選択することが出来るか否かを調べた。その結果、教育の効果は食育実施後の幼児と保護者とのかわりの中で強化されることが示唆された。</p> <p>築山依果, 林 宏一, 嶽野安子, 重谷秋穂 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p>
22. エネルギー摂取量と食品群別摂取量の関係	共	2005年03月	金城大学紀要5号13?25頁	<p>地域住民のエネルギー摂取量に影響を及ぼす食品群について探索する目的で栄養素等摂取量、食品摂取状況調査を行った。その結果、男性での特徴はアルコール摂取、女性での特徴は菓子類といった男女間でエネルギー摂取量に影響を与えている食品群に差が認められることが明らかとなった。</p> <p>岡田 茂, 林 宏一, 瀧 依果 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。</p>
23. 幼児期における食環境からの地域支援のあり方	共	2005年02月	ノートルダム清心女子大学紀要生活経営学・児童学・食品栄養学編29巻	<p>市町村保健センターを中心に行われている地域の子どもたちに対する支援活動と地域住民の支援要望との関係を探る目的で、公立保育園通園児保護者を対象に調査研究を行った。その結果、日常生活上の身近な問題については保育園、健康上の問題については保健</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
24. 大学生の生活習慣病に対するイメージについて	共	2004年03月	金城大学短期大学部紀要28号	14?22頁 所、市町村保健センターからの支援に期待する保護者が多いことが明らかとなった。 瀧 依果, 林 宏一, 畦地比佐子, 嶽野安子 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
25. 小学生の朝食摂取と生活習慣・健康状態との関係	共	2004年02月	ノートルダム清心女子大学紀要生活経営学・児童学・食品栄養学編28巻84?92頁	保健衛生分野の専門教育時に生活習慣病を教育するに当たり、大学生に対し生活習慣病のイメージを調査した。その結果、「暗い」、「つらい」といった負のイメージ点数が高くなっていた。 岡田 茂, 林 宏一 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。 小学生の朝食習慣に焦点を当て、日常の起床・就寝時間や欠食との関係、朝食摂取時の環境等について5070人の学童を調査した。その結果、朝食欠食者は就寝時間が有意に遅いこと、朝食を毎日摂取している児童の方が欠食がある児童に比べ体調不良点数が有意に低いこと、食事を共にする家族が多いほど朝食が楽しいと考えている児童が多いこと等が明らかとなった。 林 宏一, 瀧 依果, 小山洋子, 遠藤美智子, 春名かをり, 荒井裕介, 逸見眞理子 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
26. 大学生の生活習慣病に対する認識について	共	2003年03月	金城大学短期大学部紀要27号45?53頁	大学において生活習慣病を教育するに当たり、生活習慣病の理解度や学習意欲等に関する調査を行った。その結果、入学前から言葉としての生活習慣病の周知度は高かったが、詳細な内容に関しては理解が不十分であり、入学後の専門的な学習が重要であることが明らかとなった。また、専攻分野によっても学習意欲に差がみられており、教育活動時には専攻分野における生活習慣病の位置づけを明確に教示する必要があると考えられた。 岡田 茂, 林 宏一 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
<b>2. 学会発表</b>				
1. 幼児期の食事の楽しさと幼児の食習慣形成の関連と保護者が与える影響	共	2018年10月	日本公衆衛生雑誌第65巻第10号特別附録、第77回日本公衆衛生学会総会抄録集、P. 547	幼児期の食の楽しさと食習慣、保護者の食習慣との関連性を明らかにすることを目的とした。分析が可能であった398人を対象とし、食事環境、食事時間、意識等のデータを解析した。その結果、食事を楽しみにしている児は、食事時に家族と会話する割合や朝食を毎日食べる割合が高く、家庭における環境が幼児期の望ましい食に直接影響を与えていることが明らかとなった。 横山愛, 西村優希, 林 宏一, 辻口博聖, 神林康弘, 原章規, 中村裕之 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
2. 管理栄養士養成施設学生における食品衛生監視員資格取得に関する意識調査	共	2018年06月17日	第16回日本予防医学学会学術総会プログラム・抄録集、P. 71	我が国の多くの管理栄養士養成課程において取得可能となっている食品衛生監視員任用資格であるが、養成課程を修了しても就職する者が少ない現状がある。そこで、就業意欲を高めるための教育を行うための基礎資料を得ることを目的に調査を実施した。その結果、食品衛生監視員という職業に関する知識の不足が影響していることが明らかとなった。 横山愛, 西村優希, 小川彩, 松田依果, 秋田倫子, 大滝直人, 大西孝司, 林 宏一 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
3. 要介護高齢者におけるアルツハイマー病と白内障の合併による日常生活動作能力の関連	共	2018年06月17日	第16回日本予防医学学会学術総会プログラム・抄録集、P. 58	アルツハイマー病 (AD) や加齢によって発症した白内障 (CA) を持つ介護老人保健施設に入所または通所する要介護者を対象とし、それぞれが単独で生じた場合と、AD、CAが合併した場合の日常生活動作 (ADL) 能力に関して調査を行った。その結果、合併が見られた者は歩行・移動、認知機能 (精神活動を除く)、排泄動作において、合併が見られない者に比べ有意に低下が認められた。 濱岸利夫, 稲川利光, 神林康弘, 辻口博聖, 北岡政美, 三苦純子, 朝倉大貴, 鈴木史彦, 堀木大介, Anyenda Enoch Olando, Nguyen Thi Thu Thao, 日比野由利, 林 宏一, 柴田亜樹, 相良多喜子, 大河内二郎, 高椋清, 八田耕太郎, 此下忠利, 中村裕之 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
4. 管理栄養士養成課程学生の人生満足度が学習意欲に与える影響	共	2017年5月27日発表	第15回日本予防医学学会学術総会プログラム・抄録集、P.44	国民の健康寿命延伸を目標としているわが国にとって、管理栄養士は重要な専門職である。管理栄養士養成課程学生の人生に対する満足尺度と、学習意欲や進路選択の意向との関係を調査分析した。松田孝子、西村優希、大滝直人、秋田倫子、小川彩、逸見真理子、大西孝司、林宏一 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
5. 相生市中学校2年生と高等学校2年生の比較から検討する食育の課題	共	2017年5月27日発表	第15回日本予防医学学会学術総会プログラム・抄録集、P.43	思春期から青年期にあたる中高生の時期は身体的成長が著しい時期であると同時に、生活の基盤を築く重要な時期である。そこで、中高生の体格と食生活の状況、食や健康に関する知識を調査し、この時期の食育課題を明らかにした。西村優希、小川彩、三木由紀、林宏一 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
6. 児童館における食育推進のための人材支援とその課題	共	2014年6月29日発表	第12回日本予防医学学会学術総会プログラム・抄録集、P.69	地域の児童館を活用した食育の一層の推進を図るため、児童館における専門職である児童厚生員の教育養成課程上の背景や食育実施状況等を調査し、人材支援面からの食育推進の課題を検討した。廣末裕希、三浦千佳、李麻有、椎名玲子、大滝直人、林宏一、大西孝司 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
7. 近畿地方における府県別管理栄養士活動状況と管理栄養士養成施設の地理的分布との関連性	共	2014年6月29日発表	第12回日本予防医学学会学術総会プログラム・抄録集、P.66	近畿地方における人口や管理栄養士養成状況と、管理栄養士必置施設の配置状況、保健所・市町村において実施されている栄養指導件数等の関連性を府県単位で分析し、人的資源供給の地理的環境要因が抱える課題を明らかにした。椎名玲子、大滝直人、林宏一、大西孝司 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
8. 地域における食育と歯科口腔保健活動のあり方に関する一考察 一兵庫県内2市の活動推進手法の比較分析一	共	2014年6月29日発表	第12回日本予防医学学会学術総会プログラム・抄録集、P.65	地域における食育の推進を図るため、食の専門家である管理栄養士と歯科専門職の連携に焦点を当て、地域における食育と歯科口腔保健活動の推進手法について比較分析を行った。三浦千佳、木戸康人、大滝直人、林宏一、柴田亜樹、大西孝司、中村裕之本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
9. 人間ドック受診者を対象とした薬膳料理に対する意識調査について	共	2014年06月29日発表	第12回日本予防医学学会学術総会プログラム・抄録集、P.64	人間ドック受診者に対し、健康状態と薬膳との関連性を追求し、薬膳の普及度の実態を調査した。大西孝司、逸見真理子、高澤卓子、林宏一、鷹井清吉、野口衛 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
10. 施設・設備の保有状況と食育実施率を用いた児童館類型化の試み	共	2013年12月08日	第12回日本栄養改善学会近畿支部学術総会講演要旨集、P.40	食育未実施の児童館がおかれている現状を調査し、児童館における食育推進のための支援方策を検討することを目的に、施設・設備の保有状況面から検討した。その結果、児童館が設置されている地方公共団体の食育実施率の高低、調理設備の保有、公民館との交流の有無、食物栽培の充実度等で児童館を類型化できる可能性があることがわかった。李 麻有、田路千尋、大滝直人、林 宏一、大西孝司 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
11. 日本人中高年女性の亜鉛摂取量と貧血との関連	共	2013年09月14日	栄養学雑誌(第60回日本栄養改善学会学術総会講演要旨集)、第71巻第5号、P.375	40歳以上の日本人女性の亜鉛摂取量と貧血との関連を検討した。亜鉛摂取量が推定平均必要量未満の者とそれ以上の者について貧血の者の割合を比較したところ、EAR未満の群の貧血者の割合が有意に高かった。年齢、BMIおよび閉経の有無で調整したオッズ比は2.55であり、亜鉛摂取量の不足と貧血との関連がみられた。
12. 食材料把握における手づかみ法の有効性の検討	共	2013年09月13日	栄養学雑誌(第60回日本栄養改善学会学術総会講演要旨集)、第71巻第5号、P.321	簡便に食分量把握を行うツールの開発を目的とし、手づかみ法が食材料把握の指標となりうるかを検討した。手の大きさと1つかみ量の間に正の相関が見られ、個々の体位に合った食材料の計測に手づかみ法が利用できる可能性が示唆された。一方で、食材の種類や切り方によって測定結果にばらつきが見られることから、今後のさらなる検討が必要である。藤本理那、北村真理、伊豫田奈津子、竹村友美、蓬田健太郎、林 宏一 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
13. 薬膳カレーからのウコン主成分であるクルクミン測定法の改良と効能効果の検証	共	2013年09月13日	栄養学雑誌(第60回日本栄養改善学会学術総会講演要旨集)、第71巻第5	ウコンを料理(薬膳カレー)として摂取した場合、代謝促進作用といった漢方薬と同様な効能効果が期待できるか否かを検討した。その結果、薬膳カレー摂取後の身体状況は、前述の作用を有する既知の漢方薬が示す効能を表したレーダーグラフの形状と一致すること

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
14. 食育実施率から検討する児童館における食育推進の要因	共	2013年09月13日	栄養学雑誌(第60回日本栄養改善学会学術総会講演要旨集)、第71巻5号、P. 288	号、P. 295 が明らかとなった。今回の献立中のクルクミン含量は一食当たり54mgから360mgであり、薬効が期待できるとされる量に相当するものであった。 大西孝司、逸見真理子、井上里加子、高澤卓子、林 宏一、野口 衛 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。 食育未実施の児童館がおかれている現状を調査し、食育実施の可能性を探るとともに、食育推進のための支援方策を検討することを目的とした。その結果、児童館での食育実施率が高い都道府県では、外部団体との連携が強いことが明らかとなった。児童館と外部団体との連携を積極的に推進することで、今後さらなる食育の進展が望まれると考えられた。 李 麻有、田路千尋、大滝直人、林 宏一、大西孝司 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
15. 地方公共団体による栄養指導実施状況の人口統計学的検討	共	2013年06月23日	第11回日本予防医学会学術総会プログラム・抄録集、P. 50	全国の保健所、市区町村において実施されている栄養指導の被指導者数、管理栄養士・栄養士数等と地方公共団体の人口との関連を分析した。その結果、人口と栄養指導被指導延人数、管理栄養士・栄養士数等との間で強い相関が認められた。一方で、都道府県単位での分析では格差が認められることから、今後地方公共団体がおかれている環境や栄養指導体制をさらに分析検討していく必要がある。 廣末裕希、三浦千佳、李 麻有、田路千尋、大滝直人、林 宏一 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
16. 人口統計学的に特徴のあるH県内2市の次世代育成支援事業の比較検討	共	2013年06月23日	第11回日本予防医学会学術総会プログラム・抄録集、P. 49	推計人口が減少に転じ、少子高齢化の進行が著しい大都市近郊部に位置するK市と都市部から離れたA市の2市における次世代育成支援事業を比較検討した。年間出生数は、K市約1,200人、A市約240人である。K市では地域で子育てを行う体制を整える事業が多いのに対し、A市では個別対応による支援策が多かった。育児不安を抱えている母親の割合は2市ともに約5割であり、ほぼ共通する悩みであった。このように、市がおかれている立地状況によって施策に特徴はあるものの母親が求めている支援内容に変わりはないと認められなかった。 三浦千佳、李 麻有、岡崎由希子、田路千尋、大滝直人、林 宏一 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
17. 地方公共団体の区分と児童館における食育活動との関係	共	2013年06月23日	第11回日本予防医学会学術総会プログラム・抄録集、P. 42	児童館がおかれている地方公共団体の区分によって、食育実施状況や外部団体との連携状況に差が認められるのか検討することを目的とした。その結果、児童館主催による食育の実施率は、特別区が政令指定都市、中核市・特例市、市町村に比べ高値を示した。さらに、特別区は外部団体との連携が強いことが示唆され、地域社会を挙げての協働の重要性が明らかとなった。 李 麻有、田路千尋、大滝直人、林 宏一、大西孝司 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
18. 企業健診受診者を対象とした4カ年における生活習慣等の追跡調査結果について	共	2013年06月23日	第11回日本予防医学会学術総会プログラム・抄録集、P. 38	日常の食習慣を含む生活習慣が身体に対して及ぼす影響を把握するため、企業健診受診者を4年間追跡し、食習慣、生活習慣と臨床検査データとの関連性を検討した。その結果、年齢の上昇にともなって良好な食習慣を心がけようとしている者が増加すること、LDL-Chol値、HbA1c値において、良好な食習慣を有すると考えられる群では、正常者が年々増加する傾向を示していた。今後、さらに例数を増やし、長期間にわたる観察をおこなう必要がある。 大西孝司、高澤卓子、逸見真理子、井上里加子、林 宏一 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
19. 手づかみ法の有効性の検討	共	2012年12月2日	第11回日本栄養改善学会近畿支部学術総会講演集、P. 63	調理をする際に利用する「つかみ取り」に着目し、成人女性の手の大きさとつかみ取れる食材の量との関係を分析し、栄養教育現場での実用化に向けた基礎資料を得ることを目的とした。手の大きさとつかみ取り量の間には、正の相関関係が見られた。飯については一つかみが約150gとわかったが、野菜についてはその切り方によって測定結果にばらつきが見られることが明らかとなった。 藤本理那、北村真理、伊豫田奈津子、越智沙織、蓬田健太郎、林 宏一 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
20. 小学校低学年における嗜好アンケートを	共	2012年12月2日	第11回日本栄養改善学会近畿支部学	食育を効果的に行うためには、児童の実態に合った計画立案が不可欠である。児童の嗜好調査結果の分析を通して見出した課題を基

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
活用した食育の取り組み			術総会講演集、P. 47	に、小学校低学年を対象とした食育を企画した。嫌いな食べ物がある児童は7割を超え、具体的な食品は多種多様であったが、総じて野菜を嫌う児童が多かった。低学年児童は自身で食の選択、購入、調理をすることは無いため、保護者も参加するオープンスクールを活用し食育活動を実践し、高評価を得た。 本間淑恵、宮崎美穂子、塩津順子、岩井恵津子、 <u>林 宏一</u> 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
21. 地域保健・健康増進事業報告から見た兵庫県内市町における栄養指導状況について	共	2012年12月2日	第11回日本栄養改善学会近畿支部学術総会講演集、P. 46	健康増進法公布から10年を経過した兵庫県内市町の栄養指導実施状況と地域人口、行政栄養士数との関連性を地理情報学的に分析、検討した。その結果、地域人口と栄養指導件数との間、人口10万人当たりの栄養指導件数と常勤管理栄養士・栄養士数との間に正の相関関係がみられた。住民サービスの向上と安定化には非常勤スタッフの協力が不可欠であるが、地勢的に非常勤管理栄養士・栄養士を確保できない市町の実情も示唆された。 <u>李 麻有、大滝直人、田路千尋、林 宏一</u> 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
22. 幼児期の精神健康と関連する食生活および食行動について	共	2012年11月25日	第10回日本予防医学会学術総会プログラム・抄録集、P. 67	軽微な発達障害の傾向を捉えて、より早期の発見につながる新たな指標を構築する目的で、発達障害の傾向と関連する生活環境因子と食行動に現れる特徴について検討した。主成分分析の結果、ASQ得点高得点群では「1つの食品のみ食べる」が抽出され、「こだわり行動」を示すASQ下位項目とも有意な関連が認められた。児の食行動の問題と精神健康度との間に密接な関連性があることが示唆され、食生活行動の把握が発達障害の早期発見につながる可能性がある。 柴田亜樹、人見嘉哲、日比野由利、神林康弘、朝倉大貴、山崎政美、三苫純子、 <u>林 宏一、大滝直人、大西孝司、相良多喜子、中村裕之</u> 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
23. 兵庫県相生市における食の安全・安心面から取り組む食育の推進と事業評価	共	2012年11月25日	第10回日本予防医学会学術総会プログラム・抄録集、P. 64	相生市食育推進計画において5つの柱の一つと位置づけられている「地産地消の推進と食の安全安心の確保」に視点を当て、住民意識の現状、行政の取り組みについて検討した。住民が食品を購入する際に最も重視するものとして、若年層では価格、年齢が上がるにしたがって産地や品質、安全性が選ばれている。行政もこの点を重視し、住民への適正な価格による食の安全安心の提供としての地産地消を積極的に推進していることが明らかとなった。 <u>李 麻有、三木由紀、田路千尋、大滝直人、林 宏一</u> 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
24. 代謝促進作用等を有する薬膳の効能効果の評価および薬膳からのウコン主成分の確認	共	2012年11月25日	第10回日本予防医学会学術総会プログラム・抄録集、P. 63	ウコンを料理（薬膳カレー）として摂取した場合、冷え症改善や新陳代謝促進作用といった漢方薬と同様な効能効果が期待できるか否かを検討した。その結果、薬膳カレー摂取後の身体状況は、前述の作用を有するとされる桂皮湯、桂皮人参等が示す効能を表したレーダーグラフの形状と一致すること、添加ウコン中の主成分クルクミンのほぼ全量が薬膳カレーに移行していることから、漢方薬と同様な効能効果が期待されることが明らかとなった。 大西孝司、高澤卓子、逸見真理子、井上里加子、 <u>林 宏一、畑田昌輝、山崎仁、野口 衛</u> 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
25. 企業健診者を対象とした食習慣と生活習慣ならびに臨床データとの関連性について	共	2012年11月25日	第10回日本予防医学会学術総会プログラム・抄録集、P. 51	日常の食習慣を含む生活習慣が身体に対して及ぼす影響を把握するため、企業健診受診者の食習慣、生活習慣を質問紙法により調査し、性、年齢等の基本属性、臨床検査データとの関連性を検討した。その結果、年齢の上昇にともなって良好な食習慣を心がけようとしている者が増加すること、食習慣・生活習慣の高得点者には飲酒習慣が無いこと等が明らかとなった。臨床検査各値との間には明確な関連性が認められず、その原因を検討していくこととしている。 高澤卓子、大西孝司、逸見真理子、井上里加子、 <u>林 宏一</u> 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
26. ウコンを用いた薬膳カレーの効能効果の評価および薬膳からのウコン主成分の確認	共	2012年9月14日	栄養学雑誌(第59回日本栄養改善学会学術総会講演要旨集)、第70巻第5	ウコンを料理（薬膳カレー）として摂取した場合、代謝促進作用といった漢方薬と同様な効能効果が期待できるか否かを検討した。その結果、薬膳カレー摂取後の身体状況は、前述の作用を有する既知の漢方薬が示す効能を表したレーダーグラフの形状と一致すること

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
認			号、P.381	が明らかとなった。しかし、今回の献立中のクルクミン含量は一食当たり1mg程度であり、薬効が期待できる量には大きく及ばなかったため、メニューの改良を進めることとしている。
27. 現代病等に対する薬膳の効能効果の評価および薬膳からの生姜主成分の確認	共	2012年9月14日	栄養学雑誌(第59回日本栄養改善学会学術総会講演要旨集)、第70巻5号、P.380	高澤卓子、大西孝司、逸見真理子、井上里加子、林 宏一、野口 衛 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。 現代人によく見られる疲れ目、冷え性、腰痛、貧血に効果があると考えられる薬膳を数種類作製し、効能効果を検討した。既存の漢方薬と薬膳を比較し、効能を表すレーダーグラフとパターンが一致するものは、疲れ目、冷え性、腰痛であった。貧血のパターンと一致する薬膳はなかった。今後はさらに薬膳の献立を改良し、漢方薬と同様な効果が期待されるメニューを考案することとしている。 大西孝司、逸見真理子、井上里加子、高澤卓子、林 宏一、野口 衛 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
28. 中高年女性における1日間秤量法によるヨウ素、セレン、クロム、モリブデンおよびビオチンの摂取状況	共	2012年9月14日	栄養学雑誌(第59回日本栄養改善学会学術総会講演要旨集)、第70巻5号、P.352	日本食品標準成分表2010を用いて中高年女性のヨウ素、セレン、クロム、モリブデンおよびビオチンの摂取量について検討を行った。その結果、EARから推定したこれら栄養素の摂取量評価では、ヨウ素およびクロムに摂取不足の傾向がみられた。今回の検討によって、1日間調査であること、食品標準成分表への収載食品数の問題、調理方法別による成分含有量データベースの未整備等、検討しなければならぬ課題が明らかとなった。 大滝直人、秋山聡子、田路千尋、中谷弥栄子、林 宏一、君羅 満 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
29. 地域における児童館の食育展開の支援方法に関する検討	共	2012年9月14日	栄養学雑誌(第59回日本栄養改善学会学術総会講演要旨集)、第70巻5号、P.334	食育未実施の児童館がおかれている現状を調査し、食育実施の可能性を探るとともに、食育推進のための支援方策を検討することを目的とした。その結果、現状として食育未実施ではあるが将来の実施を希望する館も多く存在し、食育の場として児童館は重要な施設であることが示唆された。スタッフは食育に対する意識が高く、食育に関する情報や研修の機会等を求めており、地域社会を挙げての支援の必要性が明らかとなった。 椎名玲子、大滝直人、田路千尋、本間淑恵、林 宏一、大西孝司 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
30. 児の精神的健康に関連する食行動の疫学研究	共	2012年8月26日	第22回体力・栄養・免疫学会大会プログラム・抄録集、P.50	自閉症に特徴的な問題の1つである「こだわり・興味の偏り」は、食の選択の偏りにもつながることが懸念される。そこで、幼児を対象に児の精神的な健康状態と食行動の関連について調査した。その結果、ASQ得点高値群において「1つの食品のみ食べる」、「食事の際に座ってられない」に有意差が見られ(p<0.05)、幼児期の食育を行う際に、精神的健康の情報を加味することが重要であると示唆された。 柴田亜樹、人見嘉哲、神林康弘、日比野由利、朝倉大貴、三苫純子、山崎政美、大滝直人、林 宏一、大西孝司、相良多喜子、中村裕之 本人担当部分は研究全般に渡るため、抽出不可能。
31. 幼児期のこころの健康に関連する生活環境および行動因子に関する疫学	共	2012年03月	第82回日本衛生学会学術総会	柴田亜樹・人見嘉哲・林 宏一・神林康弘・日比野由利・相良多喜子・三邊義雄・中村裕之 自閉症傾向児の生活環境およびアレルギー疾患との関連を明らかにし、自閉症傾向児の早期発見のための指標を構築する目的で研究したものである。鼻アレルギー疾患および自閉症の障害である「独特の興味・こだわり行動」の特徴において関連が示唆された。
32. 地域における児童館の食育活動と社会資源との連携	共	2011年11月	第58回日本学校保健学会	椎名玲子、本間淑恵、林千尋、田路千尋、大滝直人、林宏一、大西孝司 児童館を活用した食育推進を図るため、児童館における食育実施状況、食育指導テーマ、指導者に期待される役割等を調査した。その結果、児童館のスタッフは児童の日常生活に密着したテーマで指導を実施しており、他職種が専門とする分野での指導が少ないことが明らかとなった。地域に存在する他分野を専門とする指導者と連携することが、児童館での食育を推進させることにつながると考えられた。
33. 渡航生殖に関する医師・患者の意識調査	共	2011年11月	第9回日本予防医学学会学術総会	日比野由利、今井竜也、島蘭洋介、神林康弘、人見嘉哲、柴田亜樹、大滝直人、林宏一、中村裕之 渡航生殖に関する国内の不妊当事者と不妊治療を提供する医師の意識を知り、わが国における生殖補助医療に関する今後の制度設計に

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
34. 人間ドック受診者を対象とした健康食品に対する意識調査について	共	2011年11月	第9回日本予防医学会学術総会	生かすため調査を行った。その結果、医師の意見として海外渡航による卵子提供を受けるよりも、国内法を整備し国内で実施することが望ましいと考えている者が多いこと等が明らかとなった。 高澤卓子, 大西孝司, 逸見真理子, 井上里加子, 村上沙緒莉, 林宏一, 岡田茂
35. 能登半島地震による高齢者の長期的な健康被害 ?仮設住居入居期間と精神的影響や生活?	共	2011年11月	第9回日本予防医学会学術総会	人間ドック受診の中高齢者と大学生のそれぞれが持つ健康食品に対する意識を調査し、世代間による相違が認められるか否かを検討した。その結果、人間ドック受診者よりも大学生の方が健康食品に興味を示していること、世代間で健康食品を利用する目的、興味の対象が異なることが明らかとなった。 神林康弘・田中純一・村田隆史・大滝直人・柴田亜樹・林 宏一・久保良美・人見嘉哲・日比野由利・中村裕之
36. 青年期女性の食事パターンと摂食障害リスクとの関連について	共	2011年11月	第9回日本予防医学会学術総会	震災による長期のストレス状態を検討する目的で能登半島地震発生後29か月の被災高齢者を対象に、仮設住宅入居期間と地震による長期的な精神的影響との関連を研究した。その結果、仮設住宅入居期間が長期にわたる群では、精神的影響が強いことが明らかとなった。 大滝直人, 田路千尋, 柴田亜樹, 人見嘉哲, 神林康弘, 日比野由利, 相良多喜子, 中村裕之, 林宏一
37. 地域における食育推進支援にかかる児童厚生員の要因と児童館の類型化	共	2011年11月	第9回日本予防医学会学術総会	摂食障害傾向を示す者の食生活上の問題点を明らかにすることを目的に、摂食障害傾向のある者の食事パターンおよび栄養素摂取状況について検討した。その結果、摂食障害傾向がある者は菓子類の摂取が多く、主食離れのある食事パターンを持つこと等が明らかとなった。 椎名玲子, 本間淑恵, 林千尋, 田路千尋, 大滝直人, 林宏一, 大西孝司
38. 薬膳の効能・効果に関する研究および薬膳からの生姜主成分の確認	共	2011年11月	第9回日本予防医学会学術総会	地域における食育をより一層推進するため、児童館の専門職員である児童厚生員が持つ要因から児童館の類型化を試みた。因子分析の結果、5つの因子が抽出され、この抽出された因子が持つ特長によって食育に着目した児童館の類型化が可能であることが示唆された。 大西孝司, 逸見真理子, 井上里加子, 村上沙緒莉, 高澤卓子, 林宏一, 野口衛
39. 幼児期のこころの健康に関連する生活環境及びアレルギー疾患に関する疫学	共	2011年11月	第9回日本予防医学会学術総会	腰痛、疲れ目、貧血、冷え性といった現代人に良く見られる症状を改善することが期待できる生姜を用いた薬膳について、漢方薬の効能効果と同じような効果を期待できるか検討した。その結果、腰痛、疲れ目、冷え性においては既存の漢方薬と同じようなパターンを示すことなどが確認された。 柴田亜樹・林 宏一・人見嘉哲・大滝直人・神林康弘・日比野由利・相良多喜子・三邊義雄・中村裕之
40. 地域社会資源との連携による児童館を活用した食育推進の可能性	共	2011年10月	第70回日本公衆衛生学会総会	自閉症とアレルギー疾患との関連性を検討するため、自閉症診断に用いられる質問項目を用いて自閉症得点ならびに自閉症スクリーニング調査の項目と生活環境因子およびアレルギー疾患との関連を調べた。その結果、小児のこころの健康状態と生活環境因子およびアレルギー疾患との間に関連が認められた。 椎名玲子, 田路千尋, 大滝直人, 林宏一, 大西孝司
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
<b>6. 研究費の取得状況</b>				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
	日本小児保健協会 日本学校保健学会 日本健康学会 体力・栄養・免疫学会 日本予防医学会 日本疫学会 日本衛生学会 日本栄養改善学会 日本栄養・食糧学会 日本公衆衛生学会